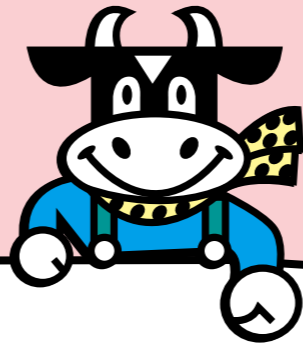


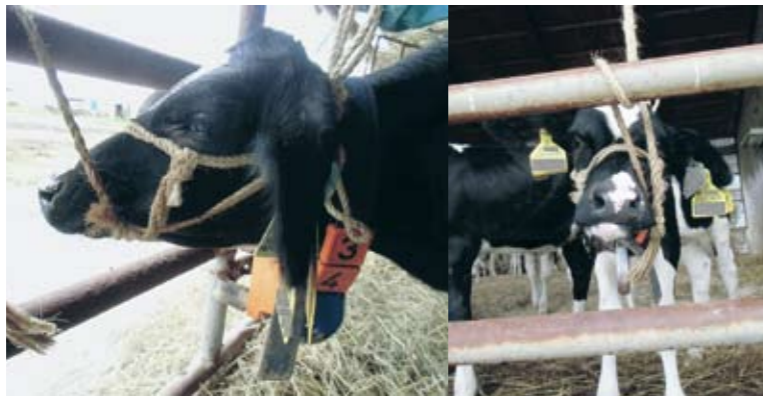


ワンポイント・アドバイス



子牛のマイコプラズマ性肺炎について

牛に感染力をもつマイコプラズマのうち、マイコプラズマ・ボビスをはじめとする数種は、子牛の集団的な呼吸器疾患の大きな要因になることがあります。子牛のマイコプラズマ性肺炎は、群移動などのストレスや栄養不足によって免疫が低下した時に発症することが多いと言われています。また、中耳炎や関節炎の原因にもなるため、耳が垂れる(写真)、首をかしげる、関節が腫れるなどの症状が見られることもあります。マイコプラズマは宿主の免疫機構から逃げ隠れる能力が非常に高いため、従来の病原微生物と比べ治りにくく蔓延しやすいのが特徴です。そのため、獣医師による適切な治療が必要です。



▲感染し耳が垂れた子牛

マイコプラズマが存在し、その乳汁を殺菌せず摂取するとマイコプラズマを体内に取り込むこととなります。初乳を介しての伝播は加温殺菌によって防げます。M・ボビスの殺菌には60℃5分以上、M・



▲マイコプラズマのコロニー

感染経路と対策

鼻汁と乳汁が主な感染源となります。

1. 子牛同士の接触

一頭あたりのスペースが狭かったり、ハッチに仕切りがなく子牛同士が自由に接触できるような環境では感染が広がりやすく、発症した子牛は強力な感染源となります。

2 環境を介した感染

マイコプラズマはバイオフィルム(微生物自身が作る膜)を作ること、宿主の体内から環境中に出てもしばらく生存できます。そのため、鼻汁の混ざった水槽、飼槽、哺乳器などを介しても感染が広がります。

3. 感染乳汁の摂取

マイコプラズマ性乳房炎に罹っている母牛の初乳には、多量のマ

カリフォルニカムでは60℃10分以上の加温が必要です。初乳加温は、他の病原体も考慮すると60℃30分以上の加温を推奨します。

乳房炎との関係

マイコプラズマ性乳房炎発生牛群において、「はじめの1頭」の8割が初産牛といわれています。そのことから、哺乳(育成期)に呼吸器から侵入したマイコプラズマは血液を介して乳腺組織に移行し、分娩後に乳房炎をおこす可能性があると考えられています。

つまり、子牛のマイコプラズマ性肺炎が発生すると、ハッチや育成舎で作業者の手や服についたマイコプラズマが搾乳牛舎へ運ばれるという『現在のリスク』はもちろん、肺炎に罹った子牛が後にマイコプラズマ性乳房炎の初発牛と

なる『将来のリスク』を抱えることとなります。

肺炎が多発した時は乳房炎にも注意し、マイコプラズマ性乳房炎の早期発見を心がけましょう。また、重篤な肺炎に罹った子牛は記録しておき、その子牛が成長して分娩した時に乳房炎に罹っていないかどうか注意した方がよいでしょう。

平成25年4月から、根室管内全体でマイコプラズマ性乳房炎のバブル検査が始まりました。この機会に子牛のマイコプラズマ性肺炎にも目をむけ、元気な子牛を育てると同時に乳房炎対策にも役立っていただければと思います。